



No. 42

1996年10月発行

# 新潟県支部報

マイ スコープ

## 「“ねぐら” ウオッチング」

栃尾市 箕輪 貴一

バードウォッチングは夜行性の鳥を見る以外は夜する人はあまりいないと思う。寝ている姿を見つけるのが大変であるし、目を覚まさないように気をつけなければならない。

秋から冬にかけて木の葉が落ち、雪が降ればねぐらとする場所も少なくなり天敵であるフクロウ、テン、イタチなどから身を隠す場所を慎重に探さなければならなくなる。送電線などにとまって眠るカラスを見ることがあるが、「闇夜のカラス」のように見えないからどこでもいいと言うわけではなさそうである。カラスのように大型の鳥はフクロウに襲われることはないが、テンなどが電柱に登ってきても電線に触れた途端に感電してしまうだろう。もちろん人間もである。(登る人はいないだろうが)

同じような大きさでも地上性であるキジやヤマドリはそんなわけにはいかない。写真のように崖や土手の窪みや木の根元の前方が開け、助走なしでも飛び立てるような所を選んで日没の2時間ほど前からねぐら近くで餌を摂りあまり動かないでいる。以前吹雪の夜、道路の吹き溜まりに頭だけを雪の中から出して寝ているキジを見つけたことがある。何かに驚いてねぐらを飛び出したのかもしれない。

小鳥は天敵から見つからないと同時に寒さからも身を守らなくてははいけない。混群で移



雪の降る夜 南向きの斜面で眠るキジの雌

動するシジュウカラが木の穴などを利用するのに対し、エナガは杉の枝先の風のあたらない所で丸くなって眠る。

早春の日没直前、藪の中で鳴いていたジョウビタキが急に鳴き止み10メートルほど飛んで地上3メートルのまさきの茂みの中へ消えていった。



翼の中に頭を入れ丸くなって眠るジョウビタキの雌

# 市街化の造成地でケリが繁殖

高橋 卓\*・小堺久美子\*・森 和久\*・山本 明

## はじめに

ケリは中国北東部からウスリー南部と日本列島など、その繁殖分布は限られており、日本でも近畿地方に多く繁殖しているという局地的な分布を示している。更にかつては東北地方に多く繁殖していたが、次第に近畿地方に繁殖地が移って行ったと言われ、その原因も不明な不思議な鳥である。

本県におけるケリの繁殖観察は、これまでに次の3例が報告または記録されているのみで、本県での繁殖は極めて少ないと見てよいであろう。①1975年の高田平野北部大潟町鶴ノ池付近の水田 ②1989年の新潟平野中央部新津市梅ノ木地内の休耕田 ③1991年同新潟市鳥屋野潟付近（繁殖環境不明）。

## 営巣地の環境

営巣地は数年前から開始されている上越市関川東部土地区画整理地域で、水田を埋めたて造成された所である。巣は、造成された土地の（山土を運んで埋め立てられた）まま雑草の生えている1区画のほぼ中央部分にあった（図1のA地点）。付近は大型の商店が進出してきており、近くの道路は車も多く通る所である。

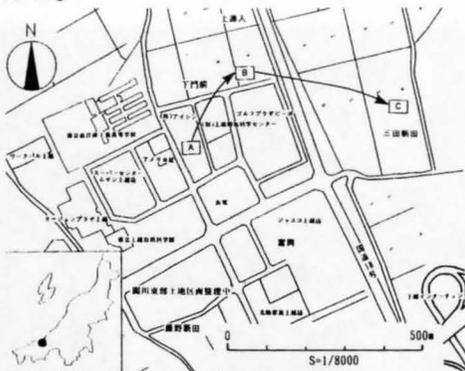


図1 営巣地付近概要図



図2 営巣地の環境

## 観察メモから

5月中旬に(財)上越環境科学センター近くを飛翔するケリを見つけ、夜間にその鳴き声も聞いた。その後、同センターの2階から営巣地付近をよく見ることがができるので、望遠鏡を用いてここからもよく観察した。

5/22:図1のA付近で成鳥を発見、うずくまっているので、巣があるものと推定した。

5/24:抱卵を確認(卵は4個)抱卵は雌雄交代で行っている。なかなか警戒心が強く、周りの道路を歩いていると、抱卵中の親は飛び立って警戒する。また抱卵中は体の向きを小刻みに変えて警戒している。6/3:昼過ぎの観察で2卵ふ化し2卵未ふ化。親は一層警戒し、抱卵中の親は飛び立って激しく警戒声を出しながら、頭上を飛んだり地上に降りたり激しく動きまわっている。もう片方の親はかなり遠くでしきりに鳴き、羽根を広げて擬傷行動をしている。16時頃の観察では、雛は既に巣を離れ自ら歩いて地面をつついて採餌していたので、残りの2卵も間もなくふ化したものと思われる。



図3 ふ化間もない雛と未ふ化卵

6/5: 雛4羽確認。雛は親について歩くというのではなく、ばらばらに行動しているがそう離れもせず、また集まったりしている。この間親は近くにいて常に雛の行動を警戒しながら見ている。カラスはもちろん、ヒバリやコチドリなどが近くに来ても親はダッシュして追い払う。日が暮れ始めると、親鳥の1羽は浅い窪みで雛を腹の下に抱いてうずくまった。このまま抱雛して夜を明かすものと思われる。



図4 親鳥と雛(右)

6/6: 朝から親鳥がケッケッケッとよく鳴いているが、警戒の声ではないらしく、雛に対して発しているようである。11時頃親子で道路を横断する途中、カラスにねらわれケケケと警戒する。6/7: この日、すぐ近くに電気店「真電」が新装オープンし、道路に車が多いためか、「真電」側より離れた(株)アイシン側に親と雛を確認した。

6/9: 親鳥と雛はゴルフプラザビーボの北側

にある水田に接する造成地(図1のB地点)の方に移っていた。雛は2羽しか確認できなかった。残りの雛2羽は見当たらず、捕食されたか死亡したのかも知れない。相変わらずコチドリやヒバリを威嚇して追い払ったり、水田で農作業している人にもその上を旋回して警戒声を出していた。6/25: B地点の北側の水田で親と雛2羽を確認、雛はツグミ大かそれより少し大きい位で、まだらの羽毛が残っていた、6/29: 親は雛から離れた所にいて、こちらを警戒している。雛のクチバシは黄色で、クビの後ろ側は灰青色になってきている。

7/2: 国道18号線の側道を行く成鳥1羽と、かなり大きくなった幼鳥の家族を確認。また引越しするのだろうか。7/6: 三田新田の休耕田(図1のC地点)の草地で成鳥2羽を確認、幼鳥を探したが草丈が10~20cm位あり見つけられなかった。7/17: 三田新田の休耕田に出向いたが、ケリの姿は確認できなかった。

\* (財)上越環境科学センター

..... 文 献 .....

- (財) 日本野鳥の会1980: 鳥類繁殖地図調査1978 P. 158~159
- 中村登流・中村雅彦1995: 原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編) P. 100
- 古川 弘1976: ケリの繁殖の観察・野鳥新潟32号 P. 5
- 藤井正明1990: ケリの繁殖について・野鳥新潟75号 P. 8
- 山田 清1995: 湖沼シリーズ6「鳥屋野潟」野鳥新潟92号 P. 6

# 西表島探険記

上越市 勝俣将明

## 西表島の紹介

西表島は、日本の最西南端八重山諸島に位置している。気候は、亜熱帯降雨林気候に属し、年平均気温が23.4度と温暖である。島の面積は、288.44km<sup>2</sup>で佐渡島の3分の1ほどの大きさである。

島の大部分は、山岳地帯であり、標高300～400m級の山々が連なり、複雑な地形を形成している。島の90%は、亜熱帯の原生林でおおわれており、その森の中には、イリオモテヤマネコをはじめとして貴重な動植物や未知の生物が生息している。

西表島は、亜熱帯林だけでなくサンゴ礁も豊富で約200種類のサンゴ類が見られ、その海では、巨大なマンタ（オニイトマキエイ）などの大型魚類を見ることができ、ダイバーにも人気があるダイビングスポットにあふれている。



## 西表探険

昨年(2011年)の8月14日から17日の4日間西表島に滞在した。東京から飛行機、高速船を乗り継ぎ約8時間で到着する。

石垣港から高速船サザンクロス3号に乗り西表島に着く間の海上に、大きな入道雲が浮かんでいたのが印象的であった。

西表島には、40分ほどで到着した、船から

降りてまず感じたことは、すごく熱いということであった。港の海水に手を入れてみるとこれがまた生温いといった感じである。

港には、3泊する宿の若者が車で迎えに来てくれたが、車に荷物を積み終えて20分過ぎてもいっこうに出発する気配がない。どうしたものか観察していると島に届けられた荷物の仕分けやら、石垣へ帰る船に郵便物を積み込んだりしている。この時、西表の人の人となりをかいま見たような気がした。

宿に到着すると荷物整理である。今回の旅は、私の他に植物研究者と昆虫研究者が同行した。宿に入ると皆それぞれに必要な装備をとりだし、今すぐにでも調査に出掛けられる準備をした。準備が終わると誰が言い出したわけでもなく自然に宿の玄関へと足がむいていた。西表の熱い太陽の中、服装は調査の時の基本装備、長袖・長ズボン・長靴でしっかりと決めた。しかし、決まっていたのも数分、長袖を脱ぎ、ハブ対策の長靴はサンダルへと変わった。

現地の人に聞いた話であるが、ハブは非常に危険な生物であるが、夜行性であることで我々が新潟でヤマカガシを見るぐらい姿を見かけることが少ないということである。

しかし、私のハブに対する恐怖心は島にいる間消されず、このあと熱帯雨林の探索でも地獄を見ることになった。

翌日は、沖縄県最大、最長17.5kmの浦内川を船で溯り、約2kmの熱帯雨林の道を進み、マリュウドの滝までを探索した。船で川の上流まで向かう間には、マングローブの林や西表の山々を見ることができる。時間が経過するごとに川は狭くなり、木々にも手が届くようになり未知の森に入る興奮を覚えた。川を

さかのぼる間には、アオサギ、ムラサキサギ、ダイサギ、コサギなどのサギ類、アジサシなどを見ることができた。

木々におおわれた森に入ると、そこは薄暗く、蒸し暑かった。私の装備は、昨日と同じしかも、ザックの中には、600mmが入っている。山道は想像以上に険しく凹凸であった。完全装備の私は、いうまでもなく途中でへたばってしまった。まわりを見渡すと、半袖、半ズボン、サンダルの人だらけであった。

マリユウドの滝までの森の中には、キノボリトカゲ、サキシマカナヘビ、イシガキトカゲなどのハ虫類の姿を見ることができたが、ハブの姿を確認することはなかった。

出現鳥類は、ヒヨドリ、シロガシラ、サンコチョウ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、カンムリワシの7種であった。

帰りは、入道雲が湧きだし、雷雨が轟きとうとう自慢の600mmはビニール袋に入れられたまま宿に戻った。

3日目は、レンタカーを借りて、島内を全域を走った。森に接した電線には、アカショウビンやリュウキュウツバメ、ズアカアオバトの姿をよく観察することができた。

また、道路脇のお花畑では、羽根を広げると20cmにも達するオオゴマダラやリュウキュウアサギマダラ、イシガケチョウ、毒を体内にもったスジグロカバマダラ（写真）を見ることができた。



4日目は、とうとう出発の日である。荷物を整理し、今回あまり使うことのなかった600mmレンズを丁寧にザックにしまった。レンタカーを返す前に森にもう一度行ってみようということになり出掛けると、そこにはアカショウビンとカンムリワシが堂々としかも長時間木にとまっていた。手元には、50mmレンズを付けたカメラが淋しくあるだけで、シャッターを押すことはなかった。レンタカーを返し、船に乗り石垣に着きその夜は沖繩を離れる淋しさと昼間の出来事も手伝い酒に酔ってしまった。

#### …西表島までのアクセスと交通手段…

西表島に着き、3~4時間その日のうちに探索したいという人には、羽田発沖繩行き1番機をすすめる。沖繩に着いたら日本トランスオーシャンの飛行機で石垣まで飛ぶ。航空運賃は、回数券（3人分）を買い一人往復8万600円である。石垣からは、往復2千円で西表島までの高速船に乗る。ここまで約8時間で到着する。宿は、今回民宿に泊り、1泊2食付き4千円であった。西表までは、20万円ほどかかるといわれているが、自分たちで計画すると半額で行くことができる。

それから西表での交通手段であるが、島内には、バスや定期観光バスもあるがなんといっても便利なのは、レンタカーである。料金は、24時間借りてガソリン代も含め1万円ほどである。少々高い感じもするが、行動範囲が広がることと夜間のイリオモテヤマネコの観察にも適していることを考えると一番良い交通手段であろう。

# 白夜の中の鳥たち (Ⅱ)

南蒲原郡栄町 渡辺 央

## 北極圏へ

雨のハバロフスクを発ち約3時間、快晴のマガダン空港に到着したのは7月2日の午前9時50分であった。ここからそのままチャーター機に乗り換え、北極圏のシュミットへ向かうことになっている。広い空港内を歩いてそのチャーター機に向かう途中、滑走路脇の草むらにタンポポが咲いていて、一花採集したかったのだが「ここではあまり脇道にそれないように」という注意があったのであきらめた。我々を待っていたチャーター機は、100人乗りくらいのプロペラ機で、真ん中をベニヤ板で仕切られていて、前半分が荷物置き場、後ろ半分が座席になっている。機内に入るとすでに席のほとんどは北極圏の町へ向かう現地の人達で占められていた。我々のチャーター機とはいっても現地の人達にも普通に利用させているという。もちろん高い料金を取っているのだからちゃっかりしたものである。真ん中を仕切るベニヤ板もそうだが、座席をはじめ内装などかなり古ぼけたもので、機内に蚊が多いのにもまいった。これで5時間の飛行である。出発前、テレビで言っていた「航空機事故が最も多いのがロシアである」という言葉が一瞬頭をよぎったが、ロシアのパイロットは抜群の腕を持つという話が救いであった。

午前11時8分、マガダン空港を飛び立つ。すでに北緯60度を越えて、眼下から森林は消え、荒涼たる山岳地帯が現れる。大きな川はレナ川だろうか、橋や道路、工場のようなものが見える。やがて、山岳地帯を抜け、広大な湿原が見えて来る。午前2時20分、飛行機はコリマ川に面したチェルスキーの空港に燃料の補給等のために着陸した。そこには寒々

とした風景と街があった。気温も出発したマガダンとは比較にならないほど寒い。途中、飛行機の中で我々の服装は自然と夏支度から冬支度に替わっていた。コリマ川には、ユリカモメ、セグロカモメ、ハクセキレイ、イワツバメなどが観察された。空港近くの食堂で軽い食事をとった後、再び目的地のシュミットに向けて飛び立った。飛行機は一面流水の東シベリア海に沿って飛び続けていたが、今度は雪が点々と輝く山岳地帯に入り、やがて流水の海に面したシュミット岬に着陸したのは午後5時40分であった。

## 白夜での初めての探鳥

シュミットはまぶしいくらいの青空の下にあったが、とにかく寒い、気温は1℃、ホテルの先の方に広がる湾は一面流水に覆われていた。空港の小さなホテルで一泊の予定で、1室2人に割り当てられた部屋は、簡単なベッドが2つ置かれていて狭かったが、きれいに整理されていた。カーテンを開け、ガラス越しに外を見ると、広大な湿原が広がっている。湖沼だろうか空の色をそのまま映したようなコバルトブルーの水面がどこまでも続く褐色の湿原の中にあった(図1)。



図1 シュミットのホテルから見た氷の浮かぶ湖沼

しかし、ホテルの周りは大変な塵で、トナカイの頭骨からありとあらゆる残物が散乱していた。窓のすぐ近くに排水が流れ出て水溜まりができていて、そこにタシギが1羽いるのが目に入った。早速双眼鏡を持って外に出ると、タシギはいなくなっていたが、その小さな水溜まりの周囲に夏羽のトウネン2羽とハマシギ1羽を発見した。この地でシギ類の夏羽に接すると北に来たという実感がわく。ハクセキレイが近くの杭に止まり、さらに地上で餌を探っている小鳥が1羽、見るとベニヒワの雌であった。ホテル周囲の建物にはユキホオジロが繁殖中で、盛んに餌をくわえて屋根瓦の下に入ったりしている(図2)。すぐ近くに飛んで来たチドリを見ると、夏羽のハジロコチドリである。この辺の空港や港などの周辺にはごく普通に見られるらしいが、湿原にはいないらしく、ここで見たのが最初で最後であった。私にとって、このシュミットでの白夜の一時は、これから行くチャウンでハクチョウに出会ったときよりも興奮し、感激した。日本でもよく知られた鳥たちが夏羽で次々と姿を現わしてくれた。頭上を鳴きながら舞う鳥がいる。ツメナガセキレイであった。

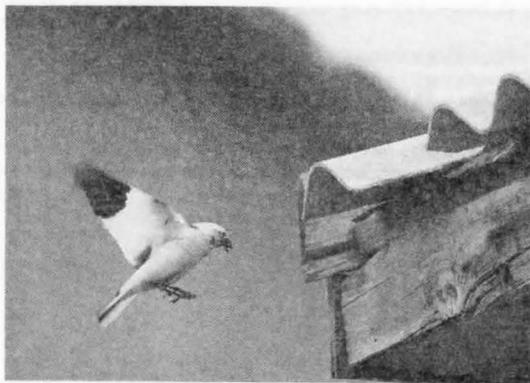


図2 巣に餌を運ぶユキホオジロの雄

午後9時を回ってもまだ十分に写真が撮れる明るさである。ホテルに入って、割り当てられたカップラーメン、黒パン、リンゴ、トマト、生ニンニクというおかしい組合せの夕

食をとった後、今度は600ミリのレンズをつけたカメラを持って再び外に出た。ユキホオジロの一番が建物の柱の上に巣を作っていて、4羽の雛がいた。まだふ化したばかりらしく、親が巣から卵の破片をくわえて捨てて行った。親は大変な寒さの中で盛んに餌を運んでいて、そのたびにまだ目の開かない雛が首を伸ばして大きな口を開けている(図3)。ときどき雌鳥が抱雛していたが、とにかく厳しい寒さの中での子育てである。このホテルの周りだけで4個のユキホオジロの巣を発見したが、他の3巣はすべて建物の屋根や壁板などの隙間に作られていた。ホテルの前にうす高く雪氷が積まれていたが、そこにゆっくりとシロカモメが飛んで来て止まった。全部で5羽の成鳥が並んでいる。やや日が陰って赤い逆光を受けた薄赤く染まったシロカモメのシルエットは何とも美しかった。湿原の方から銃を肩に、大きなトナカイを背負って帰って来る人がいた。トナカイの頭は切り離され、胴と一緒にくくられていたが、大変な重さであろう。ホテルの前の階段で獲物を下ろして一休みしているところを1枚撮らせてもらった。ユキホオジロの子育てを見たり、ハジロコチドリを追ったりしながら、シュミットでの探鳥を終わった時には午前0時を回っていた。



図3 育雛の中のユキホオジロ

# 奥只見イヌワシ保護について

保護部 山本 明

環境庁のレッドデータブックで絶滅危惧種にランクされ、天然記念物でもあるイヌワシが、全国的にも生息数が300羽余りに減少している中で、昨年来奥只見の電源開発地帯に生息する本種の保護をめぐるマスコミなどにも報道され、その繁殖行動と開発工事の関わりがクローズアップされてきた。

当支部も3月3日の役員会の決定に基づき、県知事と電源開発(株)現地事務所長宛に要望書を提出することにし、3月25日に大島支部長と保護部担当副支部長の私とで県庁に赴き、県知事との接見はできなかったものの、生活環境部環境企画課長に別掲のような要望を手渡した。また4月になって大島支部長が小出にある電発(株)奥只見大島増設調査所に赴き、同所長に同じ趣旨の要望書を手渡した。

なお県が専門家の意見を求めるために発足させたイヌワシ等希少鳥類検討委員会のメンバーの本県側の委員4名は本会の会員で、うち3名は当支部役員も兼ねている。3月の役員会では検討委員会への期待と希望の意見も出された。

その後、4月21日に新潟市駅南コミュニティセンターで、奥只見のイヌワシと水を守る会・博士山ブナ林を守る会・奥只見の魚を育てる会の3団体が主催する「奥只見のイヌワシを守るシンポジウム」が開催された。これには当支部も後援団体に名を連ね、当日は多数の会員も参加し、主催者の予想を遥かに上回る200数十名が参加する盛況であった。それだけこの問題に対する関心の深さを示していると言えよう。

いま日本産の野生生物種の中でも絶滅の危機に瀕しているものは数多くいる。トキはもはや飼育中の老いた「キン」1羽となった。

トキに本格的な保護の手が打たれたのは十数羽になってからであったが、時既に遅かった。個体数が増えたと多い時期から保護対策を講ぜよ、という警鐘と教訓を残して日本産のトキは間もなく絶滅する。様々の要因を考慮して、何とか絶滅を危惧しなくともよい最低の個体数は、およそ1000羽位であろうというのが、最近の研究者の共通の認識になってきている。イヌワシはすでにその1/3という危険な個体数である。今から本格的な保護対策に着手する必要がある。トキの二の舞になるというのは決して誇張ではない。トキの教訓を生かすことがトキを絶滅させた日本人のせめもの罪の償いであると思う。

平成8年3月25日

新潟県知事 平山征夫 様

日本野鳥の会 新潟県支部  
支部長 大島



奥只見の電源開発地域におけるイヌワシの保護について (要望)

野生鳥獣の保護に関して日頃からのご尽力に対し敬意を表します。

さて、新聞等で報道されております奥只見の電源開発地帯のイヌワシについては、当支部も重大な関心をもっているところであります。ご承知のように、イヌワシは国の天然記念物であり「種の保存法」の国内希少野生動物種に指定され、環境庁作成の「レッドデータブック」では絶滅危惧種にランクされており、その生息環境には万全の保全が望まれるところであります。近年は各地でイヌワシの生息数が減少してきており、このまま減少が続けばやがてトキの二の舞にならないとも限りません。

つきましては、電源開発およびそのための工事等によってイヌワシの繁殖にいさかかも影響を及ぼすことのないよう、貴職の責任の範囲において格別のご配慮を要望いたします。目下のところ、特に下記の点について考慮されますよう、お願い致します。

記

1. 繁殖に影響を及ぼす期間は工事を行わないよう業者を指導すること。
2. 報道されているような業者の報告書に不備などがあるとなれば、県としても独自に調査することも検討すること。
3. その他専門家の意見等をよく聴取して対処すること。

# '95朝日池探鳥会・研究発表

上越市 土田 宏

1995年11月19日(日)「初冬の水鳥をたずねて—朝日池探鳥会」という案内で、支部探鳥会と上越地区探鳥会が合同で開かれましたので参加しました。当日は本当に素晴らしい日本晴れに恵まれ、楽しい探鳥会でした。

遠く村上市からも参加した人もいて驚きました。上越地区では昨年から毎月例会を開いており、この時も多くの人が参加しました。誘ったら私の職場からも初めて参加した人もいました。

池には冬鳥の代表選手カモ達が多く、静かに羽を休めており、種類ごとの美しさに目を奪われました。トモエガモの一風変わった顔、ホオジロガモ雄の本当にはっきりした頬の白さ、いつも見慣れてはいるもののマガモの緑というか、青というか紫というか、陽の光を受けるたびに変わる美しさ、ヒドリガモのモヒカンルック、ヨシガモのナポレオンハット、オナガガモのぴんと張った尾羽等々、いつまで見ても飽きないで時間も忘れてしまう程でした。もちろんハクチョウもヒシクイもいました。カモを追いかけてくる猛禽のオオタカも出て、とにかく自分がこれまで見たことのある全てが一度に目の前に現れた探鳥会でした。

これからも、この朝日池が鳥たちのオアシスであり続けるように、鳥を知らない他の人達がこの美しさを覚えて、自然を大切にしよう願っています。

午後は大潟町民会館で研究発表会がありました。まず「ミサゴの生態について」箕輪貴一さんが観察の折に撮られたスライド写真をもとに話された後、「上越地方に飛来した鳥」と題して中川・古川・伊平の各氏らの傑作スライドが披露されました。次に長岡科学

博物館の渡辺央氏が「北極圏の鳥について」、94夏東シベリア北極圏のチャウン湾岸のツアーに参加された際に撮影された鳥についてスライドで紹介されました。こちらでは冬羽でしか見れないが彼の地では美しい夏羽になっている鳥や、こちらでは見ることのできない珍しい鳥など多く見せていただきました。最後に上越教育大学の中村雅彦先生が「高山鳥イワヒバリ—お尻の赤い鳥」と題して講演されました。高山の厳しい環境で繁殖するイワヒバリがどのような生態をもっているのか、これまでの研究成果をスライドによる図表などで分かりやすく述べられました。

この発表会では鳥を長年見たり研究したりしている人の汗の結晶を見せていただきました。午前の探鳥会から本当に時の経つのを忘れてしまった一日でした。

## 探鳥会の観察種 38種

カイツブリ・ハジロカイツブリ・  
カンムリカイツブリ・カワウ・ダイサギ・  
コサギ・アオサギ・マガン・ヒシクイ・  
コハクチョウ・マガモ・カルガモ・コガモ・  
オナガガモ・トモエガモ・ヒドリガモ・  
ヨシガモ・オカヨシガモ・ハシビロガモ・  
ホシハジロ・キンクロハジロ・ホオジロガモ・  
ミコアイサ・カワアイサ・トビ・ノリス・  
オオタカ・チュウヒ・オオバン・アオゲラ・  
ハクセキレイ・セグロセキレイ・タヒバリ・  
カワラヒワ・スズメ・ムクドリ・  
ハシボソガラス・ハシブトガラス

# 朝日スーパー林道探鳥会

村上市 大滝 清二

早朝、午前4時。宿舎の瀬波温泉松風荘を出発。参加者37名、それぞれ自家用車に分乗。曇り空だが、雨の心配はなさそうである。

朝日スーパー林道は、この冬の大雪で道路の損壊が激しく、予定していた石黒山の探鳥は、コース入口付近の土砂崩れで取りやめになってしまった。雨による地盤の緩みが心配だったが、幸い天気にも恵まれ、先ずは安堵の胸を撫で下ろした。探鳥地点、時間配分は、現地の状況により適宜決めることとし出発した。

三面川が朝日山地から平野へ流れ出る出口に三面発電所がある。そこを過ぎると、兩岸を急崖を挟まれた細長いダム湖が約6km延々続く。道路は、その左岸の急斜面、しかも相当な高さを通る「切り通し」で、トンネル、急カーブの多いなかなかの難路である。



## 探鳥地点(1) 大沢付近

ダム湖の湖尻近く、支流大沢に架かる大沢橋がある。橋の上に立ち、辺りの新緑の中から聞こえてくるキビタキやオオルリなど、小鳥の囀りに耳を傾けていた。ふと見上げると、山の稜線をすれすれに飛び、尾根近くの梢に止まった、一見してワシタカ類の仲間と分かる鳥影が目に入った。双眼鏡では、腹側が白っぽく見えミサゴのように思われたが、

やや大きめなこと、さらに出現した場所などから考えて疑わしい。しばらくして、その鳥は飛び立ち、稜線を離れた空をバックに帆翔する飛影を見せた。その姿は、紛れもなくクマタカだった。幅広い翼を広げ悠然と飛ぶ様子は、いかにも立派だった。

参加者の中から歓声が上がり、今日の探鳥会の収穫はこれで十分という声が囁かれていた。

## 探鳥地点(2) 猿田ダム付近

朝日スーパー林道は、猿田ダムの少し下流で橋を渡り、川の右岸へ出る。このあたりは、有数のブナの原生林地帯である。また、沢沿いにはトチの木が多く、時あたかも花の季節、特有の芳しい香りを漂わせていた。半開きの車の窓からアカショウビンの声が聞こえていたが、その声が大分近くなったので車を止めることにした。近くには、トチの花目当てのミツバチの巣箱が並んでいた。アカショウビンは、沢の向こうの広葉樹の斜面を鳴きながら移動していた。姿は見せなかったが、特徴のある鳴き声に耳を傾けていると、あの深紅の鳥の姿が目に見えようだった。

## 探鳥地点(3) 猿田ダム湖支流の沢

猿田ダムのダム湖の流れる支流に、以前、ブナを間伐するために付けられた沢沿いの林道がある。時間に余裕があり、また、ブナ林伐採後の様子も参考になると思い、車を下り沢へ入ることにした。

間伐されて明るく開けた沢の遠くで、響き渡るようにクロツグミが素晴らしい声で「高鳴き」している。プロミナーで見ると枯れ木の梢で、まるで何かに取り付かれたように、いっばいに口を開けて囀っている。昨日まで

聞いていた海岸の松林のクロツグミの声とは、まるで別種の鳥のようで、これこそクロツグミの正調の囀りだと思った。同行されたHさんの話では、雪解け間もないここでは、渡って来たばかりの雄が精一杯雌を呼んでいるからで、時期が過ぎた里の囀りとは真剣さが違うとのことであった。繁殖の時期、場所に関係なく小鳥の囀りには、あまり違いはない。漠然と、そう思っていた私は、懸命に囀っているクロツグミの声を耳にしながら、Hさんの話に頷いていた。

#### 探鳥地点 (4) 猿田ダム湖展望台

ダム湖に沿った道路は、石黒山の手前、土砂崩れ現場の近くで高度が最大になる。ここからのダム湖の展望は素晴らしく、景観を楽しむに遅い朝食をとることにした。車を止め外へ出ると、早速、独自のスマートな飛び方で山側の林をかすめてハヤブサが一羽、飛び去っていった。

食事の間中、崖下の茂みでトラツグミが、しきりに鳴いていた。朝の冷気の中、岸の緑を映して静まりかえる湖の水面をトラツグミの声が流れ、なんとも言えない幽玄な空気を漂わせていた。

食後の休憩時間、同行の何人かが対岸の樹の上にハヤブサを発見した。湖面から垂直に切り立った崖の上で、いかにもハヤブサが営巣しそうな場所に見えた。岩船地方のハヤブサの営巣地は、主に海岸の断崖上に多い。このように深い山間地のハヤブサを見ると、ハヤブサが好む生息環境は、結構個体によっても違いがあり、幅も広いことが理解できる。

ところで、プロミナーを使ったとはいえ、遙か彼方の、しかも静止している個体を見つけ出した発見者の眼力の素晴らしさには、大いに感心させられた。

#### 探鳥地点 (5) 奥三面部落跡

帰路、ダム開発のため移転した奥三面部落

の跡地を訪ねた。河岸段丘と分かる広い平坦面は、きれいに取り片づけられ、すでにカヤの生い茂る原野に戻っていた。そして、新しく出現した開けた環境にマッチするかのようにならぬが、上空にはサシバが輪を描いて帆翔していた。

途中、奥三面ダムの建設現場を遠望した。緑の自然の中に出現した巨大な人工構造物には、目を見張るものがあった。また、水没する段丘上では縄文遺跡の発掘が行われており、折角の機会、特に時間をとって遺跡の見学を行った。

午前11時、部落跡の一角に集合、鳥合わせを済ませ、現地で解散することにした。計画通りとはゆかなかつたが、おおむね奥三面地区の鳥相に触れることができ、また、少なからず収穫も得られたと思う。心配していた雨もなく、無事、探鳥会を終えることができ、地元案内役として大いに喜ばしかった。

#### 探鳥会の観察種 36種

カルガモ・ミサゴ・クマタカ・トビ・ハヤブサ・サシバ・キジバト・ジュウイチ・ホトトギス・ツツドリ・アカショウビン・アカゲラ・コゲラ・アオゲラ・キセキレイ・ヒヨドリ・モズ・トラツグミ・ウグイス・センダイムシクイ・ヤブサメ・キビタキ・オオルリ・ヤマガラ・ヒガラ・シジュウカラ・コガラ・ゴジュウカラ・メジロ・ホオジロ・ノジコ・イカル・ハシブトガラス・ハシボソガラス・カケス

#### ◎事務局だより◎

探鳥会後、毎回全員で記念写真を撮って送っておりましたが、幹事の不手際で写真を撮ることができず申し訳ありません。

会費残が17,896円出ましたが、県支部20周年記念事業の方に寄付させていただきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。

## 中部ブロック会議に参加して

新潟市 正山勝敏

9月28、29日と2日間、桑原さんと一緒に、岐阜の中部ブロック会議に、初めて参加させてもらい、緊張した初体験の連続でした。新幹線に乗ること約4時間、徒歩40分で目的地に着くと、岐阜支部の方々の暖かい？歓迎を受けました。

1時30分より会議、あいさつ、自己紹介、各支部より活動報告と流れて行きました。その中で、話題の多くは環境問題で、開発と自然保護と大変難しい問題でした。皆さんも新聞、雑誌、テレビ、ラジオで聞いた人いると思いますが、新潟の奥只見のイヌワシ、名古屋の万博予定地の「海上の森」、その他、と私の身近な問題として感じられる事となりどうしたら……と悩んでしまいました。

岐阜支部の、タカの渡りの調査報告書は、大変な時間と、根気のいる作業でその中でルートと夕方にも渡りがあり、1日の中で移動の予想ができ、大変に勉強になりました。懇親会に入ってもタカの話で、新潟のタカの渡りは、どうなのか？県北からのルートはと、聞かれ困ってしまいました。(だれか、山北・村上方面の方で良い情報がありましたらお教え下さい) 岐阜県支部は、みんなが当番でほとんど毎日観察しているようで非常に熱心でした。その中で、静岡支部の三宅支部長の話してハチクマは、与えた色々な餌の中で一番良く食べたのは、サツマイモだったと、言われたのにはびっくりしました。

そして、岐阜支部の熊崎さんからアメリカの

渡り鳥のインターネット情報やその他資料を見せてもらいました。素人の(入会3年目)感想としてはパソコン通信で電子メールを使っ  
ての探鳥案内、会報や、珍鳥情報などマルチメディアを使って鳥の声、映像が自宅にいながら楽しめる時代がくるのかなあと、思いました。

最後に初心者私を、遠い岐阜まで連れてきて、大変楽しかった思い出を下さった、桑原さんに感謝したいと思います。次回は是非皆さんも参加してみませんか。

## 「ラムサールシンポジウム新潟」 のお誘い

11月28日～30日

水鳥の生息渡来地としても重要な佐潟が日本で10番目(県内では初)のラムサール条約の登録湿地となりましたが、これを機に日本の湿地保全(計画・管理・利用)の実情を更めて広域的多角的視野から見直し、全国の湿地保全に関わる人々相互の情報・経験・技術を交換して、知見を集積し効果的な協力関係の基礎を築くために、このシンポジウムは開かれます。

当支部も開催地元の新潟地域実行委員会のメンバーに加わり、大島支部長と千葉副支部長が副実行委員長に、尾身保護部員が実行委員となって準備が進められています。

参加申込及び詳しい資料の欲しい方は下記までご連絡下さい。

ラムサールシンポジウム新潟 新潟地域実行委員会事務局  
〒950 新潟市花園2-1-16立花ビル 新潟県地域総合研究所内  
TEL (025)245-1207 FAX (025)245-1324

発行 1996年10月31日 No.42

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒951 新潟市東中通1番町86番地28

☎025-229-2018 本間由紀子方 <振替口座>00610-1-6002